

熱帯 バイオマス社会

調査報告

カヤン系諸民族の移動性と柔軟性
～リロケーションの観察から～

津上 誠 1

流域社会から陸域社会へ

—ジュロン川流域陸路走破の記録

祖田 亮次、石川 登 5

関連情報

マレーシアパームオイル評議会ライブラリー探訪^他

Jason Hon 14

プロジェクトHP 紹介 17

プロジェクト参加メンバー紹介 18

バイオマスの交代劇 — アブラヤシと丸太
(写真：石川 登)



調査報告

カヤン系諸民族の移動性と柔軟性 ～リロケーションの観察から～

津上 誠（東北学院大学 教養学部）

サラワク州バルイ川（ラジャン川上流部）のバクン急流より上流に住んでいたカヤン系の村々のうち 15 村は、1998 年 9 月、バクン急流における水力発電ダム建設に伴い、アサップ川およびコヤン川流域に政府が開いた居住地域（以下では「アサップ」と呼ぶことにする）へと移住した。私は 1980 年代にこの 15 村のひとつを長期調査しており、その後は頻繁に訪れることがなくなっていたが、2000 年以後、いくつかの科研プロジェクトの一環で、短期間ではあるがほぼ毎年、人々の新生活を見る機会を与えられてきた¹。

石川科研プロジェクトでは、バルイのカヤン系諸民族（オランウルと総称されることも多い）がリロケーション前後から今日にかけて生活資源を獲得するために見せてきたさまざまな工夫を記述し、サラワク先住民の生存戦略における柔軟性や移動性²の一例として示したいと考えている。以下ではこのような観点から興味深いと思われた事実をいくつか紹介しておきたい。

水力発電ダム建設に伴い州政府が提示していたリロケーション政策は、移住先をアサップにすること、バルイにおける世帯数と同じ戸数を含むロングハウス群を各村に提供すること、各世帯に一定面積の農地（ロット³）を与えること、人々がバルイで失なう土地、果樹、家屋等についてはきっちりと補償すること、などから成っていた。

リロケーションの説明に対して各村は多種多様な反応を示していたが、15 村のうち 13 村はリロケーションに同意することとなった。2 村では一部村民がリロケーションを拒否したが、その理由は、政府から提示された補償金が満足できるものではないこと、アサップでの新生活が期待薄であること、などであった。この人々はそれぞれの旧村（今日すでに水没している）からさほど遠くない場所にロングハウスを建て、今も暮らしている。

人々は移住に先立ち、よりよい補償を得るためにさまざまな準備を進めた。補償金の支払いは、果樹とアミン（ロングハウスの各世帯居住部分を指すカヤン語）については世帯ごとに、二次林地については村単位で、行われることになっていた⁴。また、各世帯は移住先においてアミン

とロット（最終的にはわずか 3 エーカーとなった）をひとつずつ受け取るようになっていた。各世帯はバルイにおける果樹本数を増やすとともに、アミンを新設することによって帳簿上の「世帯分け」を進め、アサップにおけるアミンとロットをより多く確保することに努めた。帳簿上の世帯数は実質世帯数を大きく上回ることになり、アサップにおける各村の佇まいはバルイ時代と比べると巨大なものとなった。移住後はアミンを隔てる壁があちらこちらで取り払われた。

補償金をめぐって人々と州政府は化かし合いをしてきたような感がある。例えば、バルイのアミンの補償をめぐっては別の問題もあった。各世帯はアサップで新アミンを引き渡される際、この新アミンは無償ではなく買い取りであり、バルイのアミンの補償金は新アミンの代金を差し引いてしか受け取れない旨を記した書類が用意されており、署名を求められた。人々はそんな話は聞いておらずとまどったが、とりえず署名だけはし、アサップでの住み家を確保した上で、以後長年に渡り不服を表明し続けた。州政府は最近になってこの主張を受け入れ、アサップのアミンは無償となった。アサップ住民の側に不満を残したケースも枚挙にいとまがない。補償額算定のためのサーベイで果樹の本数を概算しかしてもらえず、満足行く補償金が支払われなかった事例、1958 年以後に州政府に申請することなく拓かれたジャングルは NCR（Native Customary Rights）下の土地にならないとする州法が適用されたため、長年耕してきた土地やそこに植わった果樹が補償対象にされなかった事例などがある。

アサップに移ってからしばらくの間、誰もが語っていた不満は、肉、魚、燃料、水、木材などがほとんど自給できず、お金で買うしかないということであった。電化製品に頼る限り電気代を払わなければならないこと、車がなければちよつと遠方に耕作に出かけるのにも運賃を払わなければならないことも、不満の種であった。このような違和感はその後なくなっていったのかと言うと必ずしもそうではないようで、およそ全ての支払いというものについて逃れられるものなら逃れようとする態度は変わっていない。肉、魚、燃料、水、木材、移動手段などは本来自らの手で調達するものだとする感覚は今でも多くの住民に健在であり、そのことは後述のように、人々が旧村付近に戻った時に見せていた満足そうな様子にも、よく現れていた。また人々は水道代金の請求については徹底的に無視を続けている

し⁵、上述のように新アミンの代金支払も拒否し続けたのである。

世帯によって受け取り額に差はあるものの、多くの人々はロケーションに伴う補償としてこれまで手にしたことのないような大金を入手することになり、しばらくの間、買い物ラッシュが続いた。ビントゥルーの船着き場付近にある1泊40リンギのホテルはアサップ住民なじみのものとなり、周辺にはいつもアサップ住民が誰かしらうろろする光景が見られた。しかし多くの人々の買い物は堅実であったと思われる。高額な買い物としては車、より安価なものとしては、オートバイ、冷凍庫、冷凍冷蔵庫、電気釜、ガスコンロ、洗濯機、ビデオCDプレーヤー、テレビ、オーディオセット、応接セットなどがあった。現地交通が陸路となったこと、近場での狩猟や漁労が難しくなったこと、フルタイムの電力供給があること、川が近くにない代わりに水圧の安定した水道が引かれていることなどからして、これら商品の多くは必需品だったと言ってよいだろう。

さて、アサップに移住した人々が最初にした生産活動は、州政府が望んでいたようなロットにおける換金作物栽培ではなく、アサップ周辺のロット外の土地（州有地やロギングライセンス下の土地）における焼畑耕作であった。カカオ等の果樹を植えておき、あわよくば将来、伐採会社から賠償金を得ようとする意図もあったというが、そこには何よりも、バルイでの生活と同様に焼畑陸稲耕作を将来にわたって続けようとする意思が働いていた。こうして移住当初のアサップ周辺におけるロット外地には「土地獲得競争」の様相が見られることにすらなった⁶。州法レベルで考えるならば何の法的効力もない競争なのだが、焼畑耕作について州政府や伐採会社が特に強い規制をかけてくることのない状況下において、「土地は拓いた者のものになる」という旧来のローカルな土地法は人々の間で有効なものであり続けたのである。

ロット外での焼畑陸稲耕作ラッシュは、しかしながら、移住後数年したら下火になり、人々は各自のロットでの焼畑耕作と、その跡地におけるカカオとコショウの栽培を、本格化させていった。その間、伐採会社は（アサップの人々が焼畑に使用した土地を含む）ロット外の周辺地の多くをアブラヤシのプランテーションに造成していった。そしてさらに時間が経った今日においては、アサップにおけるカカオやコショウの育ちにくさがはつきりしたこともあり、多くの世帯が農耕活動をロットにおける（場合によってはロット外の州有地における）アブラヤシ栽培にシフトさせ始めている。

因みに、もしアサップの人々がアブラヤシ栽培だけで食べていこうとするのであれば、現在の3エーカーというロット面積では十分でない。しかしロット外の周辺地の多くは既に伐採会社のアブラヤシ・プランテーションあるいはその予定地になっており、州政府にとりアサップ住民のロット用地不足の問題は八方塞がりになっているようである。

アサップの人々の歩みを大まかに見てきたが、その様子を思い切ってまとめてしまえば、長期的な視野に立って気長に事業を営んでいく態度であるというよりはむしろ、手近なチャンスに小刻みに飛びついていく態度であると言ってよいだろう。悪く言えば行き当たりばったりのそのような態度の根底には、生存に関するある種の楽観的な読みがあるように感じられる。

アサップは、人々が嘆くとおり、お金がないと何も手に入らない場所だ。それなのに周辺のアブラヤシ・プランテーションは働き場所としてはあまりに賃金が低い。多くの親が子に望むのは、学歴をつけ都市部で安定した給料で暮らせるようになることだが、そうなれる者も沢山はいない。なるほど、男性は低学歴であってもまだ伐採の続く奥地のキャンプで比較的よい給料を望むことができる。また、ロットで稼ぐことに希望がないわけでもない。カカオやコショウは期待を裏切ったが、アブラヤシには期待できそうである。狭いロットなので額は限られるが、安定収入にはなりそう。このようによい話もある。しかしだからといって、彼らの置かれた状況に不安要素がないとはとても思えない。そういう彼らを楽観的にさせているものは何なのだろうか？

最近の観察の中で私は彼らの楽観視の彼らなりの根拠を見いだせたような気がしている。それは他でもない、彼らが長年暮らしてきたバルイの地である。

2010年の終わり頃、バルイ川がダムでせき止められた結果、いよいよ水位が上昇してくると、アサップ各村から多くの人々が各自の旧村付近の沿岸に舞い戻り、水上家屋を仮住まいにして、水位上昇を利用した商業伐採を始めた。発電機と冷凍庫を水上家屋に置き、魚や肉を貯蔵して都市部に売りに出る者も現れた。2012年からは焼畑をしに戻る者も目立つようになった。焼畑をしたジャングルは伐採会社がかつて部分的な伐採を行っていたジャングルではあるが、天然林であることに変わりはなく、陸稲の収穫は予想通り見事なものとなった。

このように、移住後15年経った今でも人々はバルイの民であることをやめてはいなかったのだ。彼らは公式的には自分たちがバルイの土地を政府に対して放棄したことを

よく承知している。しかしそこは依然としての彼らの場所であり続けている。これは先に見た、ローカルの人々の間に、州法とは別レベルの話として、旧来の土地法が生き続けていることと同じである。アサップ各々の村にとり、バルイのかつての自村周辺の広大な土地は、いざとなれば肉、魚、燃料、水、木材、そして耕作地までも独占的に調達できるテリトリーとして、理解されているのである。

ただし彼らはバルイに帰ろうとしているわけではない。2013年9月に私は2度目のバルイ沿岸訪問を行うことができたが、このとき現地で遭遇することができた馴染みの夫婦は、最近作ったばかりの焼畑脇の作り小屋で、私に非常に印象的な話をしてくれた。「なるほどここでの生活はよい。陸稲の収穫はびっくりするほどよかった。魚や肉に困ることもない。しかしここに来るのに使うガソリン代は馬鹿にならない。そしてアサップには私たちのアミンがある。ロットにはアブラヤシが植わっている。アサップには学校や医療施設もある。私たちはここに住みつくつもりはないし、毎年ここにくることもないと思う。」彼らはアサップの拠点を手放す気など全くないのだ。

ただし、この夫婦がつけ加えた次の話は聞き逃すべきではないだろう。「バルイに作ったこの拠点は、子どもや孫と一緒に遊びに来ることができるような場所として、確保しておきたい。」遊び場を確保するなどと言っているが、もし単なる遊び場なら、ガソリン代を費やしてやって来、焼畑をし、果樹を植え、作り小屋を建ててまでするはずがない。彼らがここに来てやっていることは、彼らの生存戦略の一環としての拠点作りに他ならない。簡単に言えばこの地は、いざとなったときに生き延びるための拠点なのである。

もっと一般化して述べるならば、アサップの人々のリロケーション後の生活に対する楽観的とも言えるような態度は、彼らの高い移動性や柔軟性を前提にした生き方に根ざしていると言ってよいだろう。彼らがバルイの旧村付近に舞い戻り小さな拠点を作ることを最近始めたのも、古い生活への回帰なのではなく、ひとつの場所に固まらず、生存の様々な可能性を確保しようとする、彼らの戦略の一環であると捉えた方が適切である。そして、そもそも彼らがかつてリロケーションの話を聞かされたとき比較的簡単にそれを受け入れたことも、リロケーション後の生存可否に関する彼ら独自の読みから来ているのだと理解すべきだろう。

彼らの生存様式を許容するような外的条件がいつまで続くかどうかはわからない。しかし少なくとも今のところ、

彼らの読みが大きく外れていないことだけは確かなのである。



写真1: せき止められたバルイ川の沿岸に作られた水上家屋
(フヴァット・ライン氏提供)



写真2: アサップのある村では人々が水没した旧村付近の陸地を視察しに行った。
写真は「この村の領域に入る者は必ず〇〇(村長名)または△△(近辺での滞在が多い人の名)に連絡せよ」との趣旨の警告看板を立てたところ。
(フヴァット・ライン氏提供)



写真3: アサップの村のロットではアブラヤシ栽培が盛んになりつつある。



写真 4: バクンダムの上側にある船着き場
アサップの人々が各自の旧村付近に行く場合、ここまでは車で来て、その先はモーターつきボートを使う。



写真 5: バルイ川一支流の沿岸地域に拓かれた、2012 年の焼畑跡と 2013 年の新焼畑。数世帯の焼畑である。



写真 6: 焼畑（同上）に作られた出作り小屋でくつろぐ人々。



写真 7: 焼畑（同上）の脇に浮かぶ水上家屋。



写真 8: 焼畑（同 5-7）に作られた出作り小屋



写真 9: 出作り小屋（同上）の脇に作られた竈



写真 10: 出作り小屋(同上)に滞在する夫婦が出してくれた立派な夕食。魚、数種の野菜、米、水、そして調理に使った薪も、すべて現地調達である。ただしアサップからしっかりとプロパンガスを持参しているところが興味深い（写真後方）。

脚注

- ¹ 今回は別の角度から行った観察については津上2005を参照されたい。
- ² この問題を提起した論考としては ISHIKAWA 2010 がある。
- ³ 英語の名詞 lotがそのまま行政用語として採用され、現地語でも使われるようになっていく。
- ⁴ 村単位で受領した二次林補償金を村民間でどう分けるかは各村に委ねられた。
- ⁵ 水道代支払い免除の話はまだ聞かれていないが、かつては定期的に届けられていた請求書が今では届けられなくなっているという。
- ⁶ 多くのカヤンはこの様子を“pehile’ tana”と述べていたが、これは通常の焼畑耕作初期に見られる土地獲得競争を指す表現である。

参考文献

- 津上誠 2005、「オラン・ウル～バルイ流域民の現在から～」
林行夫・合田濤（編）『講座・世界の先住民族～ファースト・ピープルの現在～第2巻：東南アジア』明石書店 pp.307-323
ISHIKAWA Noboru 2010, The Social Resiliency of High Biomass Society: A Historical Analysis. TSUGAMI Makoto (ed.) Report on Perceptions of Natural Disasters among Peoples of Sarawak. Tohoku Gakuin University. pp. 22-41

流域社会から陸域社会へ —ジュラロン川流域陸路走破の記録—

祖田 亮次（大阪市立大学 文学研究科）
石川 登（京都大学 東南アジア研究所）

1. はじめに

本科研の社会科学系の調査では、流域社会の人びとの生活とアブラヤシ栽培との関係を現在進行形で記録している。巨大なプランテーションにその生活世界を取り込まれつつある人びと、そしてアブラヤシをみずから栽培することに決めた人びとの生活がどのように変わっているのかを気にしながら、フィールドワークを行っている。

眼前で進行するさまざまな変化のなかで、人びとの空間的な「動き」とその意味を理解することは重要である。これらの動きは、結婚を契機とした婚出入に加えて、人びとの「労働移動」（出稼ぎ）や都市への「移住」、そしてロングハウス単位の「移転」や世帯ごとに耕作地に建てられる出づくり小屋の「移動」（耕作地移動）など、さまざまな形や単位の空間移動を含んでいる。この10年あまりに進んだ木材産業の衰退、プランテーション経済の浸透、ピントウル Bintulu 都市部および港湾部の労働市場の拡大、道路網（舗装路とプランテーション道路）の伸長などは、これらの空間移動と密接に絡み合う要因となっている。

人びとが移動するにあたっては、個人、世帯、ロングハウスなどさまざまな単位に分けて考える必要がある。それぞれが今いるところから他所に移動する理由も千差万別だ。しかしながら、少なくとも私たちがクムナ Kemena 川やジュラロン Jelalong 川流域で見聞きする「移動」には、以下のような形を見て取ることが可能である。

- a) 若年／壮年層の都市部での就労
- b) 都市就労者／居住者のアブラヤシ栽培のための定期的帰村
- c) ロングハウスの道路沿いへの移転
- d) 出づくり小屋（ランカオ langkau）の道路沿いへの移動

最初の2つは、いわゆる urban-rural continuum、すなわち人類学や地理学における「都鄙連続体」といった概念のもとで理解される世帯の空間的エクспанションに関わるものである。現在、加藤・祖田のアブラヤシ小農調査チームは、都市就労／居住者の仕送りや労働力提供に依拠しながら内陸部で進行する小農的アブラヤシ植栽について興味深い調査を行っている。そこでは、内陸部ロングハウスに居住する親の世代と都市部の子供たちの世代が空間的には離れていてもひとつの世帯経済としてアブラヤシ栽培を進めるケースがみとれる。

このような人びとの労働力や資本の移動に加えて、生活空間そのものの移動、すなわちロングハウスや出づくり小屋の「川」沿いから「道」沿いへの移動も最近顕著になっている。今回の私たちの調査は、特にイバン語でランカオ langkau と呼ばれる農作業のための「出づくり小屋」について、その道路沿いへの移動の現状をおさえることを目的として、ジュラロン川最上流のイバン・ロングハウス（ルマ・アバン Rh. Aban、ルマ・アワン Rh. Awan）までの陸路走破という小さなエクスペディションを行った。以下はその道すがらの見聞記録である

2. 河川から道路へ——ランカオの形態と分布

ほんの数年前までは、ジュラロン川の上流に車で行くということは、一般の旅行者にとっては、現実的なことではなかった。私たちも、基本的にはボートで移動しながら、川沿いのロングハウスを訪問していた。しかし、多くのロングハウス住民が道路沿いに移動しているという噂を聞き、なかでも、クブル Kebulu のルマ・ジュソン Rh. Jusong のロングハウスなどは、現状では無人に近いという話に強い関心を持った。

実際のところ、人々はなぜ道路沿いに移っているのか、ランカオと呼ばれる出づくり小屋はどのような分布になっているのか、人々は道路沿いでどのような生業に従事しているのか、ロングハウス・コミュニティはどのように維持されているのか／いないのか、といった関心を持って、道路沿いを動いてみたわけである。

河川から道路へという移動は、これまでもサラワクの各地でみられた現象ではあるが、近年のジュラロン川流域の動きは、サラワクの景観変化との関係で考察すると、従来と比してやや複雑な背景が見えてくるように思われる。ジュラロン川流域における河川から道路へという動きは何を意味しているのか、旅行しながら考えてみた。



写真 1: ランカオの諸相

ランカオの分布をロングハウス・コミュニティ別にみると、ベースとなるロングハウスの近くに分布していることがわかる。その形態は、写真でも示しているように、雨風をしのぐだけの簡素なもの（写真 1－①）¹ から、メランティやカポールを使ったしっかりしたもの（写真 1－⑨）、もはや出作り小屋というよりは家 *rumah* と呼ぶべきもの（写真 1－⑯）

など、多様である。ルマ・ラサツ・トゥバ Rh. Lasah Tuba の領域では、カヤン Kayan と結婚した福州華人の「家」を訪問したが（写真 2）、そこは寝室が 5 つも ある巨大な家で、裏庭にはツバメハウスも建設されていた。

今回の旅行で見られたランカオの分布概要は次の通りである。

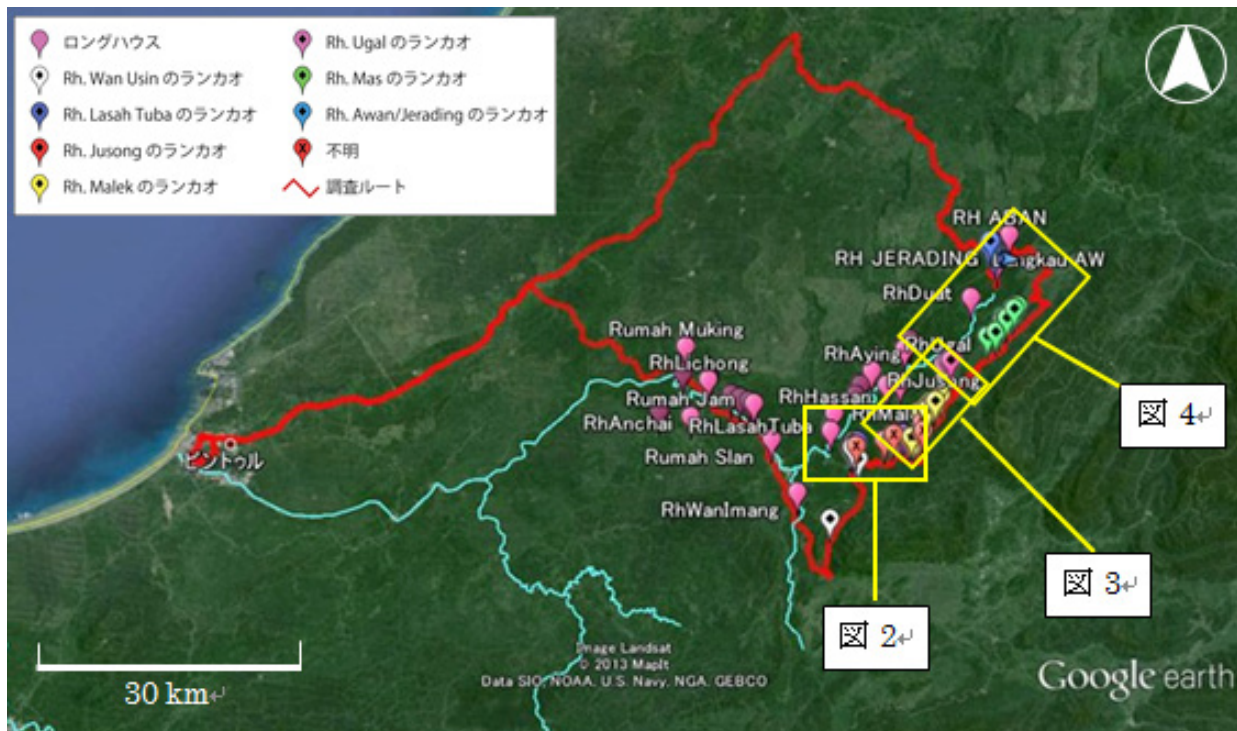


図1: 陸路移動ルート（凡例は図 1 ～ 4 に共通）



図2: ルマ・ラサツ・トゥバ〜ルマ・ジュソン付近のランカオの分布



図3 ルマ・ジュソンおよびルマ・マレック付近のランカオの分布

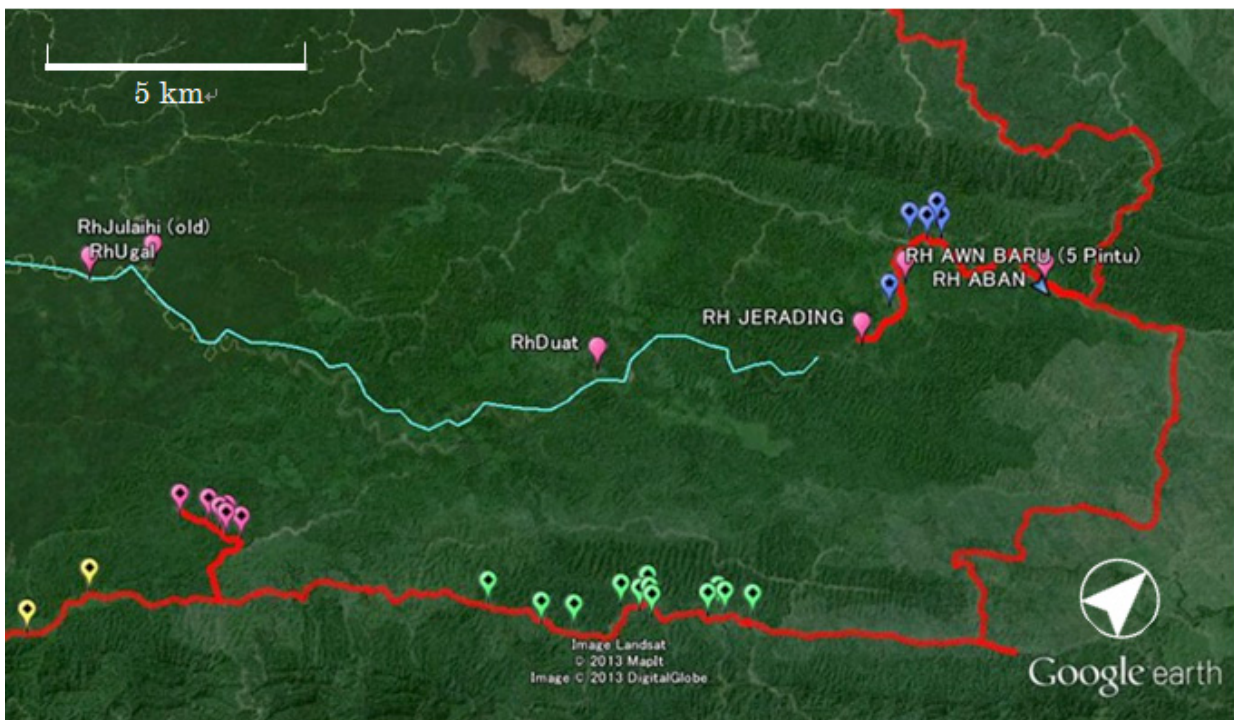


図4: ルマ・ウガール〜ルマ・アワン付近のランカオの分布

バクン道路 Bakun Road から、未舗装の伐採道路（リンブナン・ヒジャオ道路）に入っていれば、トゥバウ川沿いおよびジュラロン川沿いのカヤンのロングハウスから移動してきたランカオが目立つ。その後、ジュラロン川沿いのプナンやイバンのランカオが分布するようになる。

図中の赤色のマークで示されたランカオは、クブル川（ジュラロン川支流）中流のルマ・ジュソンのロングハウス出身者のランカオであり、黄色のランカオはクブル川上流のルマ・マレック Rh. Malek 出身者のランカオである。両者の間のロングハウス領域のおおよその境界はクブル川（左岸はルマ・ジュソン、右岸はルマ・マレック）となっているおり、互いに明瞭な境界意識を持っている。

図中の桃色、緑色、青色のマークは、それぞれルマ・ウガール、ルマ・マス Rh. Mas、ルマ・アワン²の出身者のランカオである。どの村の出身者が作ったランカオなのか分からない場合は、赤色に×のマークを施した。

今回の観察と聞き取りで得られた具体的なランカオの数字としては、以下のようになる。

- ◆ルマ・ワン・ウシン Rh. Wan Usin（カヤン）のランカオ：9 軒
- ◆ルマ・ラサツ・トゥバ Rh. Lasah Tuba（カヤン）のランカオ：6 軒
- ◆ルマ・ジュソン Rh. Jusong（プナン/イバン）のランカオ：8 軒
- ◆ルマ・マレック Rh. Malek（イバン）のランカオ：32 軒
- ◆ルマ・ウガール Rh. Ugal（イバン）のランカオ：6 軒
- ◆ルマ・マス Rh. Mas（イバン）のランカオ：12 軒
- ◆ルマ・アワン Rh. Awan /ルマ・ジュラディン Rh. Jedrading（イバン）のランカオ：5 軒
- ◆不明：7 軒

もちろん、分岐道沿いにも数多くのランカオが存在しているようだし、メインロード沿いでも見落としたランカオがあるかもしれないので、上記の数字は目安でしかないが、おおよその傾向をつかむことはできるだろう。これらのランカオの分布をまとめると、以下のようになる。

a) ルマ・ジュソンやルマ・マレック、ルマ・マスのランカオは、1970 年代に伐採会社リンブナン・ヒジャオによって建設された伐採道路（Jalan Rimbunan Hijau）のメインロード沿いに分布している。

b) ルマ・ウガール、ルマ・アワン/ルマ・ジュラディンの領域では、各ロングハウスに向かう分岐道を中心にランカオが分布しており、一部はメインロード沿いに位置している。ルマ・ラサツ・トゥバについても、ロングハウスへの分岐道に多くのランカオが存在しているという（今回

はルマ・ラサツ・トゥバへの分岐道には入らなかった）。

c) ルマ・アバンは、ロングハウス自体がメインロード沿いに位置しているためか、ランカオをほとんど作っていない。

このように、分布そのものだけを見ていると、各ロングハウスとそこから派生したランカオとが近接していることが分かる³。次章では、彼らが道路沿いにランカオを作る意図について、聞き取りから得られた情報を記述する。

3. なぜ道路沿いか—生業・生活の変化

今回の 2 泊 3 日の行程では、ルマ・ワン・ウシン出身者のランカオで 1 件（写真 1—③）、ルマ・ラサツ・トゥバ出身者のランカオで 2 件、ルマ・ジュソン出身者のランカオで 2 件、ルマ・マレック出身者のランカオで 2 件、ルマ・ウガールの村長のランカオ（写真 3）で 1 件の聞き取り調査を行うと同時に、ルマ・アバン（写真 4、5）のロングハウスおよびルマ・ジュラディン（写真 6、7）のロングハウスでも村人たちから話を聞いた。道中では、ルマ・ジュソンのランカオで 1 泊（写真 1—⑫）、ルマ・アバンのロングハウスで 1 泊して、詳しい話を聞くことができた。また、ピントウルに戻ってから、ルマ・マスの村長宅（ピントウル旧市街から 2 km 弱の住宅地）を訪ね、そこでも聞き取り調査を行った。

1) 利便性

道路沿いに移動した多くの人が移動の理由として挙げるのは、河川沿いの交通の困難である。ジュラロン川は水量の季節変化・日変化が激しい。かつては、6 月初旬のガワイ（年に一度の収穫祭）の際も、水量が少ないためにロングハウスに帰れなかったことがあったという。逆に、ロングハウスで病人が出た場合でも、水量が足りずに町に行けず、医療サービスを受けられないということもしばしばあったという。

ただ、道路沿いにランカオを建設した結果として、ロングハウスの常住人口と、都市就労者のロングハウス帰村頻度がさらに減少しているようである。とくに、ルマ・ジュソンは、平日はほぼ無人の状態、ロングハウスにいるのは「犬と鶏だけ」という。しかし、彼らはロングハウスを完全に放棄したわけではなく、2 週間に 1 回、週末にロングハウスに戻るといふ。それは、ジュラロン川とクブル川の合流点にある小学校の寄宿舎に子供がいて、月に 2 回、彼らを迎えに行く必要があるからだといふ。また、



写真 2: カヤン村落に婚入した福州華人ア・ピン氏の家



写真 5 ルマ・アバンでの記念写真



写真 3: ルマ・ウガールの村長ウガール氏(左)とロギー氏(右)



写真 6 ルマ・ジュラディンの外観



写真 4: ルマ・アバンの外観



写真 7 ルマ・ジュラディンの廊下（建設途中）

*nungkong api*⁴の慣習も残しているため、どの世帯も少なくとも1か月に1回はロングハウスに戻るという。

一方、ルマ・マレックに関して言えば、全世帯が道路沿いにランカオを作っており、彼らはすでにクブル川沿いのロングハウスを「放棄」したという。現在は、道路沿いに新しいロングハウスを建設中で、河川から道路へと生活の場を完全に移動させようとしている。

2) アブラヤシ栽培

道路沿いにランカオを建設した人の多くは、アブラヤシ栽培を始めている。その多くは、数百本を植えたばかりであるが、一部の人はすでに結実した果房（FFB）を売り始めている。苗で買う人、種で買う人、他人のアブラヤシ園で十分に熟した実を拾ってきて、その種を自分で植える人など、いろいろである。

車を持っている人は、自分で果房を運び、福州華人ア・チャイ Ah Chai の検量所や BLD（Bintulu Lumber Development：ジュラロン川上流域からスアイ Suai にかけて広がっているアブラヤシ・プランテーション）の搾油工場に売りに行っている。近々、サムリン Samling が近隣に搾油工場を建設する予定で、それが完成すればそちらに売るという人もいる。

車を持っていない人は、果房を仲買人に売ることになる。仲買人はトゥバウ近くのカヤンが多く、ルマ・ラサ・ムリン Rh. Lasah Mering の村長自身がローリートラックで買い取りに来ているという。その場合の運賃は、アブラヤシ果房の売り上げの半分になるという。ただ、他にもローリートラックでの仲買を行っている者もいるようで、3分の1の値段で運搬を引き受けてくれる仲買人もいるという。現在までのところ、この地域での果房販売の量が少ないために、十分な情報はまだ得られていない。

アブラヤシ栽培は、バクン道路沿いの先住民集落に比べると、相対的に遅れている印象はあるが、それでも今後の重要な収入源として期待されていると感じられた。

3) 土地の権利

ジュラロン川沿いの人々が道路沿いに移動することには、別の理由もある。つまり、プランテーション会社に土地を取られてしまうことを懸念して、自分たちの土地（*temuda*）の権利を確保・強化しようとしているという。

ルマ・ウガールやルマ・アバンでは、我々の訪問に

懐疑的な目を向ける人たちもいた。それだけ、道路沿いの「土地問題」は、河川沿いよりも敏感なものになりつつあるとの印象を受けた。もっと言えば、かつて行われていた商業的木材伐採と違って、現在リンブナン・ヒジャオが行っているアカシア・プランテーションや、サムリンが行っているアブラヤシ・プランテーションは、先住民に「土地問題」を強く意識させるものになっている。

元森林局のロギー氏の話では、商業的木材伐採のころは、ローリートラックの交通量が多く砂埃が激しいために、普通の人は道路沿いに住みたいとは思わなかったし、当時は先住民が「森林」劣化の問題に言及することはあっても、「土地」そのものが取られることを心配したり、土地所有権を主張したりすることはほとんどなかったという。しかし、商業的木材伐採が終了し、そこにプランテーションがやってくるようになった。プランテーションは、これまでの「うわもの」を選択的に採るという行為ではなく、土地そのものに投資をし、その投資分を回収することで収益を得る。そのため、土地の囲い込みという経済的行為が不可欠となる。

ジュラロン川沿いの多くの先住民は、自分たちの居住区域における問題が、従来の「資源争奪」ではなく、サラワク各地で起こっている新たな「土地闘争」へと遷移しつつあることを強く意識し、ここ数年、道路沿いへの移動を加速させているということが容易に推測できる。

特に、土地の権利主張のあり方として、ルマ・マスの事例は興味深い。ルマ・マスの人々は、1950年代末にルボック・アントウ Lubok Antu からジュラロン川上流に移住してきた。しかし、その十数年後にはジュラロンの地を放棄して、下流のトゥバウに降りてきて、カヤンから土地を購入し、トゥバウ川沿いにロングハウスを建設した。現在、トゥバウ川沿いのロングハウスでは、古老を中心に稲作を行っている世帯もあるが、ロングハウスに残る若者は少なく、多くはビントゥルに家を持ち、賃金労働に従事している。その一方で、かつてジュラロン川上流で稲作のために開いた道路沿いの焼畑休耕地で、数年前からランカオを作ってアブラヤシを植え始めている。数十年前にジュラロン川上流の土地を放棄したかに見えるロングハウス・コミュニティが、ビントゥルという都市をベースにしつつ、トゥバウ川沿いのロングハウスも村落として維持しながら、なおかつ1960年代の居住地であったジュラロン川上流でアブラヤシ栽培という土地投資型の経済活動を展開している。このことは、サラワク先住

民の多处居住 (multiple residence) のあり方や、土地の権利主張形態の新しい展開として非常に興味深い事例である。今後も引き続き調査を行っていきたいと考えている。

4. おわりに

ジュラロン川流域をいつものようにボートで移動するのではなく、4WD 車輦で移動したことにより、いままで私たちが流域社会として理解してきたものとは異なるランドスケープを観ることが可能となった。今回私たちが目にするのできた流域社会の変化は以下のようにまとめることが可能である。

1) 河川上流域の流域社会から陸域社会への変化

クムナ/ジュラロン川流域では、多くの民族集団によりロングハウスを中心とした流域社会が形成されてきた。その生活は河川流域を中心に営まれ、「川」は人びとをつなぐ最も重要なチャンネルとなってきた。その昔、ブルネイのマレー商人は複数の水系を繋ぎながら川を遡上してブナンの人びとと交易し、1960 年代以降の木材伐採の時代には、川は大量の丸太を下流に送り、内陸に莫大な富をもたらした。

森林から得られる資源の抽出、具体的には、非木材森林産物採集と木材伐採（河畔林伐採）とそれらの交易において、川は人びとの活動の基盤となってきた。しかしながら、頻繁な現地調査で私たちは、流域社会における生存基盤が陸域に移りはじめていることを感じている。ビントゥルとバクンを結ぶ幹線道路に加えて、毛細血管のように内陸を走る伐採道路、そして近年のアブラヤシ・プランテーション内外の道路ネットワークの伸長にあわせて、ロングハウスに駐車されているトヨタ・ハイラックスやプロトン、ペロドアなどの車輦数は増えるばかりである。

伝統的な森林産物や木材と比べてアブラヤシが決定的に異なるのは、それが原義的に「道」を必要とすることである。酸化に抗して 24 時間以内に収穫物をプロセスしなければいけないという化学的な要請は、社会的なネットワークをも大きく変える。アブラヤシの小農生産の成立基盤が搾油工場へのアブラヤシ搬入のための道路の存在にあり、地域経済が木材からアブラヤシへ急速に転換しつつある現在、私たちは流域社会の「陸化」、すなわち riverine から terrestrial への大きな社会編成の変化のはじまりを目にしている

のかもしれない。

2) 人びとの適応プロセスとしての「陸化」

すでに記したように、現在のジュラロン川流域で起きていることは、従来の「資源争奪」ではなく、ある種の「土地闘争」とでも呼ぶべきものである。木材伐採の時代に収奪の対象とされたのは、人びとの生活世界の「うわもの」、すなわち再生可能なバイオマスであった。これに対して、現在のプランテーション開発で人びとの生活世界から奪われようとしているのは「土地」であり、その上で産出されるさまざまな森林資源も、現状では半永久的に失われることになる。

このようなプランテーション経済（あるいはプランテーション・ポリティクス）の浸透に対して、人びとは伐採時代に行なった道路封鎖などではなく、道路沿いへの出づくり小屋（ランカオ）の建設、そしてその周辺での焼畑およびアブラヤシ植栽という実効的土地占有行為を通して、土地に対する権利主張、すなわち土地の占有／利用権を確保し、さらには所有権を確立していくという腹積もりのようである。

土地の権利関係については、近年のプリミータ・サーベイ⁵の動きとも関連して、非常に敏感な問題として、先住民社会のなかで強く意識されつつある。

3) 今後の課題

以上、道路とランカオに焦点を当てて行った調査旅行を紹介した。今後の課題としては、次のことが挙げられる。

a) ランカオに移り住み、森を拓く人びとの土地権利主張の根拠は何なのか。いくつかのコミュニティは、ジュラロン川流域に移住した際に、行政官 District Officer やブナンの首長と交わした文書や地図を保持している。そこに描かれた村の領域 *pemakai menoa* と、近年の開発過程における土地権利主張が、どの程度整合性を持ちうるのかについては、より精緻な調査が必要である。

b) 都市、ロングハウス、ランカオを行き来する「多处居住」形態を、先住民の適応プロセスの一局面、すなわち急激な生活環境の変化に抗する（あるいは順応する）戦略として位置づけ、考察する必要がある。従来の農村→都市移動、河川→道路移動と何が違うのかを、あらためて問い直す必要があるだろう。

c) トゥバウより下流のエンカス Engkasu、ラサン

Rasan、ムキン Muking といった地域では、すでに数年～十数年先行して、バクン道路沿いへの移動を経験しており、アブラヤシ栽培についても先進的である。それらの地域との比較も必要になるであろう。「小農化」のプロセスに関わる時間差／地域差のバリエーションについても目を向けておくべきであろう。

d) これらの生活・生業の変化と、植生やランドスケープの変化が、どのような相関／対応関係にあるのか／ないのか、についても調査する必要がある。これは、アブラヤシ栽培が可逆的な商品作物の導入なのか、不可逆的な生業・生活変化なのか、という問題とも深く関係する。

ここ数年だけを見ても、ジュラロン川沿いのロングハウスや集落の居住率が低くなり、訪問する側としては寂しさや虚しさを禁じ得ない状況であった。しかしそれは、必ずしも村落コミュニティの崩壊というわけではなく、「流域」から「陸域」への変化過程の一部と考えるべきかもしれない。その過程において、政治や経済や民族や生態といった要素が複雑に絡み合いながら、それらとの関係で人々の移動戦略が練り上げられていく。これらの変化を「流域社会」から「陸域社会」への「移行」あるいは「置換」とみるべきか、より広い意味での「流域社会」の再編成と捉えるべきか、それを判断するには、彼らの生活の「陸化」過程と都市化過程をより詳細に見て行くことが必要になると思われる。

脚注

¹ イバン語では *langkau jungap* と呼んだりもする。 *sago* や *lilik*、*biru* 等の葉を使用したものが多い。

² 2011 年 3 月の火事の後、ルマ・アワン (5 戸) とルマ・ジュラディン (20 戸) に分裂した。

³ ルマ・マスはトゥバオ川沿いに位置しており、例外といえるが、これについては 3 章 3) 節で詳述する。

⁴ 普段はロングハウスの部屋を留守にしている、月に一度は台所で火を使わなければならないというイバンの慣習で、この規則に従えない場合は、ペナルティを支払うことになる。ルマ・ジュソンはもともとブナンの集落ではあるが、このようにイバンの慣習も取り入れている。

⁵ プリミータ・サーベイは 2010 年にサラワク州政府によって提示された、内陸先住民地域における土地測量・登記の新しい考え方である。この測量・登記のあり方について、まだ詳細不明の部分が多い。

州政府は、内陸先住民の土地権を保証するための新しいコンセプトであることを強調しているが、内陸先住民の社会では懐疑的な受け止め方をしている場合が多いようである。

関連情報

- ・マレーシアパームオイル評議会ライブラリー探訪
- ・マレーシアゴム研究所 (RRIM) 紹介
- ・マレーシアゴム協会ブックストア紹介

Jason Hon (元京都大学 環境学堂)

**Malaysian Palm Oil Board Library
(マレーシアパームオイル評議会ライブラリー)**
所在地: Bandar Baru Bangi, Selangor, Malaysia



アクセス

ライブラリーへはタクシーを使うことをお勧めします。

それでも施設への道順は複雑ですからタクシーのドライバーにホームページから印刷した地図を見せるのが早道だと思われます。ライブラリーからの帰りにもタクシーが便利です。帰りの時間に迎えに来てもらえるようにアレンジすることをお勧めします。

(地図及びルートは以下のホームページをご参照ください。)

<http://www.mpob.gov.my/en/location-maps>

MPOB への入館は Petronas と同じところになります。Akademi Kementerian Pertahanan Awam を過ぎると MPOB の正門はその隣になります。この入口で施設への入場パスを受け取ってください。その際に運転免許証など身分証明書のコピーを渡します。ライブラリーのドアはオートロックになっておりエレベーターへのアクセスなどに際しては受け取った入館証をセキュリティ端末にかざしてドアを開けるようにします。



入館証を使つてのアクセス



Palm Shoppe
(入館証はここで受け取ります)



ライブラリー内のデスク

ライブラリー

1. ライブラリーへの入館証 (電子キーカード) を一階の Palm Shoppe で入手します。その際、入館証と引き換えに身分証をデスクに預けることになっています。2 階 (3F) へはこの入館証を使って入る事が出来るようになります。ライブラリーを出る際にはカードを返却し身分証を受け取ってください。【注意】入館証を持ったまま外出することはできません。入館証と身分証明書の引き換えを行う Palm Shoppe は昼食時には閉まります。もし昼食時にライブラリーから外に出る場合には昼休みに入る前に一旦入館証を返却して身分証を返してもらってから外出するようにしてください。そうでなければ昼休みが終わって Palm Shoppe が開くのを待つことになります。

2. ライブラリーに手荷物を持ち込むことはできません。外部に棚がありますのでそちらを利用して下さい。5 リングットのデポジットでコインロッカーを利用することも可能です。デポジットは使用後に返却されます。

所蔵資料

1. ライブラリーが所蔵する資料類は包括的なものであるとは言えませんが研究報告・学術文献などは最新のものが揃っています。

2. ライブラリーには MPOB による出版物のコーナーがあり、マレーシア政府による統計情報も提供されています。もっともこうした情報の大半は Web から入手可能です。

データベース

1. 各種データベース・エンジンはライブラリー内で利用可能です。オンラインでのサーチエンジンへのアクセスも可能 (オフラインでのサーチエンジン同様) です。内容によってはメンバー登録が必要となるケースもあります。

が7日間限定の無料トライアルで登録することでも利用可能です。課金に関してはこちらを参照してください。

<http://palmoilis.mpoib.gov.my/>

学会論文、レポート類、規格&特許

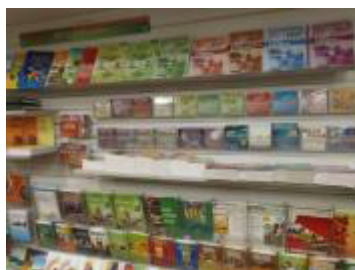
1. 学会論文については使用されたパワーポイント資料、討論会資料、ワークショップ資料、ディスカッション資料など。各種レポートについては現地調査、施設訪問、オイルパームに関する規格や特許に関する各種資料のアーカイブが用意されています。
2. 有益な情報源となりうる施設であり、ネット上やここ以外では得られないような情報も多く見つかります。

Palm Shoppe

1. MPOB の出版物を多数揃えて販売しています。出版物のカatalogもここで入手可能ですが常に最新の情報と言う訳には行かないようですのでその点に関してはネットでのチェックが賢明だと思われます。
2. 注文はメールオーダーも可能で MPOB は注文に応じて発送費を含めた最終的な価格を連絡してくれます。発送は全世界規模で対応してくれます。



特別収蔵資料群



MPOB による出版物



カフェテリア

マレーシアゴム研究所
Rubber Research Institute of Malaysia (RRIM)
Lembaga Getah Malaysia (LGM : マレー語)
所在地 : 260 Jalan Ampang, Kuala Lumpur,
Malaysia
HP : <http://www.lgm.gov.my/>

アクセス

タクシーまたはバスを利用。建物は華人協会 (SuCasa service apartment の次) のビルの隣になります。建物は国家遺産に登録されています。

現地に着くまでに保安所で訪問者用のパスを受け取っておく必要があります。パスの受領には身分証を預けなければなりません。退館時にパスを返却すると身分証も返されます。

推奨資料

1. Palm News Booklet: MPOB 発行。油糧種子、グローバルな油脂業界の動向と発展に関する包括的なニュースをまとめて紹介。半年ごとの発行で 2008 年、2009 年と 2010 年分が発行されている。
2. Palmoil Update: MPOB 発行、毎月刊。オイルパームに関する最新情報、月間の生産統計や価格、輸出関連やグローバル市場の動向等を紹介。一冊 20RM 程度 70 ページ。
3. Warta Sawit (マレー語) : 小作自営農むけ無料のニューズレター。季刊年 4 回発行。登録済みのオイルパーム苗床育成農家のリストを掲載。

施設

1. 文献参照のためのデスク : ライブラリーは昼休みの時間閉まります。昼休み時間と開館時間の確認を忘れずに。
2. インターネット用ワークステーション : 検索 / データベース利用と同様の環境が用意されています。インターネット接続は制限なしで利用が可能。
3. カフェテリア : Info Café が地階にあります。マレーシア料理を提供しており価格はリーズナブルです。

ライブラリー

1. ライブラリーは現在 (2013 年 3 月時点) 建築中の状態です。間もなく完成する予定となっております。このためライブラリーへはメインドアから入る事が出来ませんので裏の入口を利用して下さい。収蔵書のほとんどは箱詰めにした状態で建物が完成するのを待っている状態です。
2. 飛込みの利用者は施設利用料として RM 35 の支払いが必要となります。年間利用者として料金を払ってメンバーになる事も可能です。規約などの詳細は Web ページを参照してください。メンバー登録すると利用ごとの支払いは不要で書籍の貸出も受けられるようになります。

3. 検索エンジンが使えるワークステーションが用意されています。使用している検索エンジンはウェブサイトと同様です。

4. 書き物用のデスクは用意されておりますが、照明は少し弱く感じられます。

その他のインフォメーション

1. この施設にカフェテリアはありません。ですが RRIM ビルの向かい側の売店、あるいはレストランを利用できます。

2. 書籍の購入は（施設内の）書店に出向くかウェブサイトを通じたオンライン購入が可能です（詳しくは次項をご参照ください）。



RRIM ビル



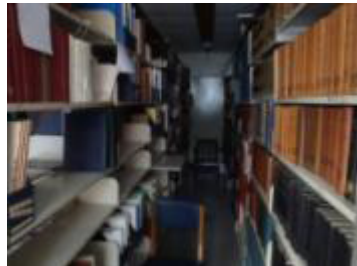
メインエントランス



国家遺産を示すプレート



RRIM のライブラリー内部



RRIM のライブラリー内部



リファレンス作業用のデスク

マレーシアゴム協会ブックストア
Bangunan Getah Asli
所在地：(KLCCの向かい側, Kuala Lumpur, Malaysia)

当書店は KLCC の向かい側に位置しています。RRIM からはバスで行くことが出来ます。バス代は 1RM。RRIM の建物の向かい側からバスに乗ります。つまり西の方向に進むことになります。KLCC Petronas ツイン・タワーが見えたら

停留所でバスを下ります（バスの乗車時間は 5-10 分程度でしょうか）。RRIM 前からタクシーに乗る手もありますがルートはバスと同じでかかる時間にも違いはありません。タクシーによっては RRIM の前では客を拾わないこともあるようです。

近隣のホテルから向かう場合には LRT に乗って KLCC で降りるようにします。タクシーを使う場合にはドライバーに KLCC そばの Bangunan Getah Asli の方向に行くよう伝えます。



マレーシアゴム協会ビル



書店に並べられた関連書籍



KLCC Petronas ツイン・タワー

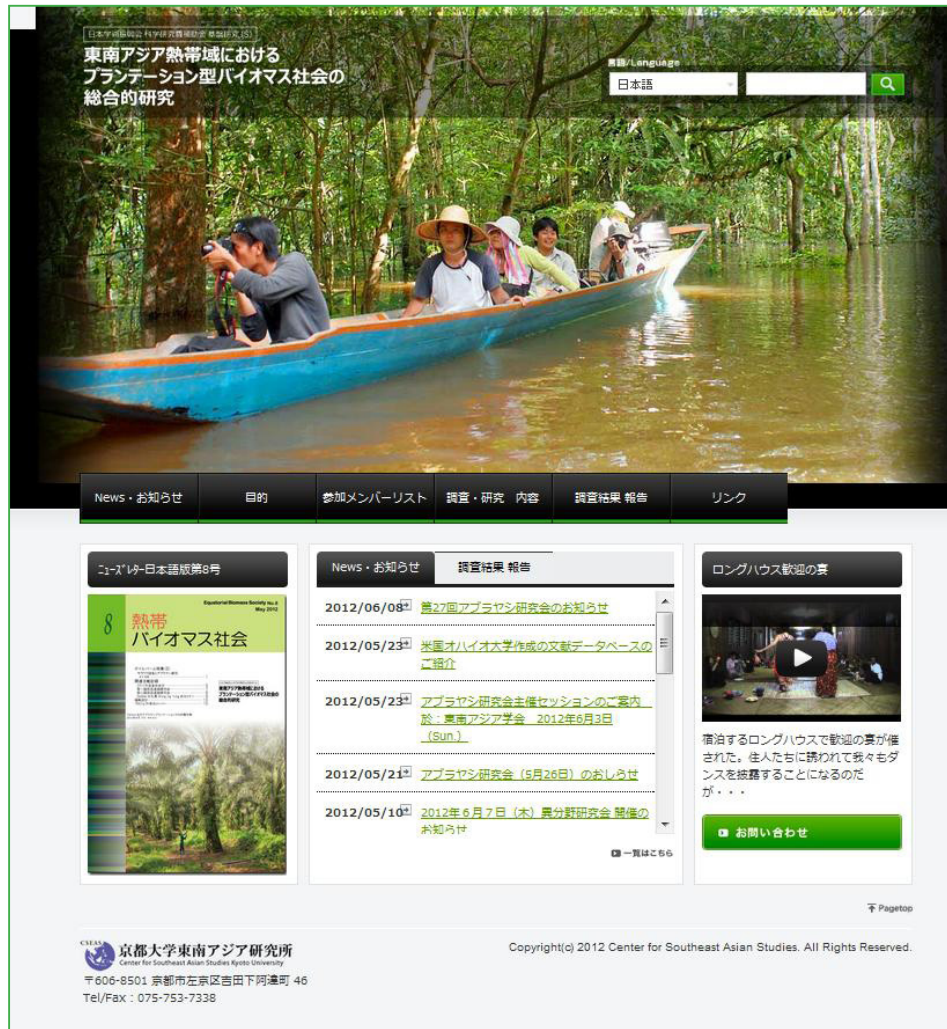
この書店の品揃えは満足できるものではありません。関連書籍のリストを始めとした情報はウェブサイトから入手可能ですし注文もオンラインで可能です（ですからわざわざ書店まで出向くことはお勧めしかねます）。

詳しくは以下のサイトをご参照ください。

<http://rios.lgm.gov.my/cms/ebookshop/index.jsp>

本プロジェクトのホームページのご紹介

<http://biomasssociety.org>



当プロジェクトのホームページを開設しております。

- ・ メンバーによる調査報告
- ・ 講演会やワークショップ等、関連活動の紹介
- ・ ニュースレターのバックナンバー（英語版もあります）
- ・ 最新の活動などについても随時お知らせしております。

是非一度、ご覧ください。

プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川 登	人類学	京都大学 東南アジア研究所
研究分担者	祖田 亮次	地理学	大阪市立大学 文学研究科
	河野 泰之	自然資源管理	京都大学 東南アジア研究所
	杉原 薫	グローバル・ヒストリー	政策研究大学院大学
	水野 広祐	農業経済学	京都大学 東南アジア研究所
	徳地 直子	森林生態保全学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	内堀 基光	文化人類学	放送大学 教養学部
連携研究者	鮫島 弘光	生態学	京都大学 東南アジア研究所
	藤田 素子	鳥類生態学	京都大学 東南アジア研究所
	甲山 治	水文学	京都大学 東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	津上 誠	文化人類学	東北学院大学 教養学部
	奥野 克巳	文化人類学	桜美林大学 リベラルアーツ学群
	市川 昌広	東南アジア地域研究	高知大学 農学部
	小泉 都	生態人類学	京都大学 農学研究科
	生方 史数	天然資源経済学	岡山大学 大学院環境生命科学研究科
	市川 哲	文化人類学	立教大学 観光学部
協力者	定道 有頂	ライフサイクル・アセスメント	日本エヌ・ユー・エス株式会社（JANUS）
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学 東南アジア研究所
	田中 耕司	東南アジア地域研究	京都大学 研究国際部学術研究支援室
	佐久間 香子	文化人類学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	小林 篤史	歴史学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学 地域研究統合情報センター
	内藤 大輔	地域研究	総合地球環境学研究所
	Jason Hon	動物生態学	元京都大学 地球環境学堂
	加藤 裕美	文化人類学	京都大学 東南アジア研究所
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Abdul Rashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lee Hua Seng	森林社会学	元 Sarawak Timber Association
	太田 淳	歴史学	広島大学 文学研究科
	鹿野 雄一	河川生態学	九州大学 工学研究院
	竹内 やよい	生態学	国立環境学研究所
	目代 邦康	自然地理学	公益財団法人 自然保護助成基金
	大竹 真二	映像人類学	モイ
	木谷 公哉	情報学	京都大学 東南アジア研究所
事務局	田中 園子	総務・会計担当	京都大学 東南アジア研究所
	中根 英紀	情報管理・発信担当	京都大学 東南アジア研究所

編集後記：

本ニューズレターはプロジェクトメンバー以外にも配信いたしております。

配信を希望される方は事務局：

(nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。

またイベントのお知らせ、過去のニューズレターなどは当プロジェクトのホームページ：

(<http://biomasssociety.org/>) で見るができますので、そちらの方もご参照ください。

(鮫島弘光)

京都大学 東南アジア研究所
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL/FAX:075-753-7338
<http://biomasssociety.org>
E-mail: nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 鮫島 弘光 中根 英紀(基盤S事務局)

ジュラロン川流域の伐採道路沿いにあるランカオ
(写真: 石川 登)

